

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
＜令和元年度 事業計画＞

道東SDGs広域パートナーシップ まちづくりプロジェクト

道東SDGs推進協議会

2019.5

①取組で目指す地域像

2022年度末
地域の状態

- 道東SDGs推進協議会の事業によって形成された、持続可能な社会づくりに向けた各地域のコミュニティが、道東地域に根差した共通のビジョンのもとで継続的に活動し、広域のコミュニティを形成している
- 推進協議会を初めとした各主体の活動により、地域一帯でSDGsが広く認知され、SDGsの考え方に基づいた環境・社会・経済の同時解決、統合的向上を目指した取り組みが、地域のコミュニティにおいて、多様な主体の協働により新たに考案され、展開されている

2019年度末
地域の状態

- 2018年度のワークショップ実施地域（別海町・浜中町・中標津町）において、地域特有の環境課題と社会課題に関する同時解決アイデアの事業化が、少なくともひとつ以上、進められている
- 2019年度のワークショップ実施地域（根室市・標津町）において、SDGsの共通理解に基づいたコミュニティが形成され、2018年度実施地域とともに、道東地域の持続可能な社会づくりに向けたビジョンの基盤を共有している
- 上記の実現のため、推進協議会の働きや役割が整理され、SDGsの考え方に基づいた活動の促進や意識啓発の継続を可能とする、多様な主体との協働体制が敷かれている

目指す未来
からの逆算

2018年度末
地域の状態

- 道東SDGs推進協議会を設立し、取り組みを進める体制を整えた。道東地域の関係者に個別訪問して説明を重ね、3町（別海町・浜中町・中標津町）においてワークショップを開催。これまで一堂に会したことがなかった、異なる職種や立場の地域住民の対話が実現した。これにより同時解決に向けた今後の取り組みアイデアが創出されたとともに、SDGsに関する共通理解に基づく、プラットフォームの形成が進んだ
- 推進協議会や構成主体の活動を冊子にとりまとめ、関係者に広く配付することで、道東地域において活動やSDGsが広く周知された

目指す未来
からの逆算

② 運営体制の整理（ステークホルダーとの関係性）

【道東SDGs推進協議会の構成主体】

酪農業等を中心に、クリーニング業・ICT関連・地方スーパー・地方銀行等の民間事業者や、環境NPO等の市民団体、議会議員等、多様な職種・立場の会員で構成されている任意団体（会員は25名）。道東地域では中標津町・根室市・別海町・浜中町の会員が多い。各地域では会員以外に、地域のステークホルダーがワークショップや事業に参画している。

【各地域の連携・協働主体】 ※1 地域はSDGsワークショップ開催順 ※2 下線は現時点では連携・協働が確立していない主体

地 域	取り組みに係る協議会会員	会員以外の主要な参加者（SH）	外部 SH のうち行政・教育機関等
別海町	（有）中山農場、別海町市議会議員	酪農家、ちえのわ事業共同組合、社会福祉法人べつかい柏の実会 等	別海町総務部総合政策課
浜中町	NPO法人シマフクロウ・エイド、 （株）グレイトフルファーム	NPO法人霧多布湿原ナショナルトラスト、大地みらい信用金庫 等	浜中町企画財政課課、北海道霧多布高等学校
中標津町	（株）東武、（株）養老牛 山本牧場、 （株）富岡クリーニング店	（有）希望農場、中標津青年会議所 等	中標津町企画課、北海道中標津高等学校、北海道中標津農業高等学校
根室市	根室・落石地区と幻の島ユルリを考える会、（株）Winma Planning、 （合）モーク	（株）マルコシ・シーガル、（有）かねむら村上商店、根室市青年会議所、根室市移住交流促進協議会 等	<u>根室市総合政策部</u> 、 <u>北海道根室高校</u>
標津町	—	<u>標津町エコ・ツーリズム交流推進協議会</u> 、 <u>第一次産業従事者</u> 等	標津町企画政策課、 <u>標津サーモン科学館</u>
羅臼町 ※標津町開催	—	—	羅臼町企画振興課、羅臼町教育委員会

※ 関連事業：SDGsをテーマとして高校生がプレゼンテーションを競い合う「（仮称）SDGs甲子園」の予選会・全国大会が道東で開催される予定である。推進協議会はこの事業への協力し、釧路市においてもSDGsワークショップを開催する。根室市・標津町（羅臼町）で開催するワークショップでは、広域ビジョンを見越して「持続可能な第一次産業の実現に向けた、環境課題と社会課題の同時解決」を目指して対話を行うが、釧路市では、釧路市都市経営課・釧路市青年会議所・北海道観光調査会や若者・女性支援の活動団体等と「持続可能なまちづくりに向けたSDGsの活用」をテーマとする予定である。

③ 2019年度末までの到達目標

項 目	目 標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 プラットフォーム機能を有する広域コミュニティの形成（協働支援機能の強化）	共通のビジョンに基づいた、異なる職種や立場を越えた各地域や広域のコミュニティが十分に形成されていない。そのためまず推進協議会では、各地域で対話の機会（ワークショップ）を設け、SDGsを「接着剤」として地域コミュニティ形成のきっかけをつくる。 昨年度に引き続きワークショップを開催するほか、推進協議会が中間支援的な機能を持ち、持続可能な社会づくりに関して共通認識を持った「各地域での取り組み情報の収集・発信」やそれを踏まえた「広域ビジョンの検討」、また関係主体の協働による「同時解決の取り組みアイデアの事業化支援」等を支援することで、各地域のコミュニティの連携（広域化）と、同時解決を具体的に事業や政策として展開していくためのプラットフォーム化を進める。
【取組課題②】 持続可能な第一次産業の実現に向けた環境課題の解決 ※地域によって異なる	2019年度に根室市・標津町（羅臼町）で開催するワークショップでは、2018年度に開催したワークショップの成果を踏まえてさらにもう一段階、経済・社会・環境の側面の統合的向上、課題の同時解決を進めるべく、「持続可能な第一次産業の実現に向けた課題の整理と解決策の検討」に取り組む。地域固有の特性によって、課題の組み合わせは異なるが、以下のような課題が考えられる。2019年度中に、何らかの同時解決アイデアを考案し、2022年度までの活動の見込みを、推進協議会のサポートのもと作成する。 【取組課題②】 持続可能な第一次産業を実現する上での「環境課題」 ・ 第一次産業を支える自然資本（森林・湖沼・河川・海洋等の生物多様性）の保護保全 ・ 収穫量や品質に影響を与える気候変動の緩和策と適応策、産業廃棄物の削減 ・ 第一次産業に関わる臭気の問題（酪農業・漁業） ・ バイオマス資源の未活用（特に酪農業）
【取組課題③】 持続可能な第一次産業の実現に向けた社会課題の解決 ※地域によって異なる	【取組課題③】 持続可能な第一次産業を実現する上での「社会課題」 ・ 担い手不足（地域からの若者の流出） ・ 収入の不安定さや世帯の持ちにくさ（特に漁業） ・ 技能実習生への過酷な作業等の集中のおそれ

④ 課題解決に向けたスケジュール（2019年度）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定		第3回連絡会							第4回連絡会		全国報告会	
【取組課題①】 プラットフォーム機能を有する 広域コミュニティの形成（協働 支援機能の強化）		第3回協議会（総会）			第4回協議会	役員会（月1程度）			第5回協議会		第2回ビジョン会議	第6回協議会
				ワークショップ（根室・標準）		第1回ビジョン会議						
												最終報告書の作成
【取組課題②③】 持続可能な第一次産業の実現に 向けた環境課題と社会課題の同 時解決											活動紹介冊子の 作成・配布	
【関連事業】				ワークショップ （釧路）			SDGs 甲子園 道東ブロック					

⑤ 2カ年事業計画（H30.8）からの変更点

計画の変更点（項目）	変更した理由
地域課題の再検討と 道東SDGs推進協議会の 関わりの再整理	同時解決を目指す地域の環境課題と社会課題については、地域別に再検討することとし、ワークショップを実施した5地域（2018年度3地域、2019年度2地域）の進捗状況を確認しながら、そのうち1事業以上の整理、実践を促進することとした。また、2019年度のワークショップは「持続可能な第一産業の実現に向けた課題の整理と解決策の検討」をテーマとして掲げることとした。 これは当初の計画では、道東SDGs推進協議会の主要なメンバーが従事する酪農業に関して、環境課題と社会課題の同時解決を図るアイデアが創出される想定であったが、ワークショップでは対応する取り組みアイデアが見出されなかったためである。 なお、協議等を進める中で「環境課題と社会課題の同時解決」に実際に取り組むのは各地域のワークショップの中心人物（主に会員）やその他のステークホルダー（ワークショップ参加者等）であるという点が合意され、推進協議会は中間支援の役割を有するという整理を行った。
2年目の取り組み地域と 広域ビジョン検討に 向けた取り組み	当初の計画では、ワークショップを2年目に新たに3か所で実施する予定であったが、事業創出を図るとともに政策協働を進める必要があると考え、行政機関を巻き込むために新たに広域ビジョンを検討する場を2回設け、ワークショップは3回を2回とすることとした。 広域ビジョン検討の会議は、ワークショップが開催された地域から、第1回目は行政機関の総合戦略等の担当者等を中心に招集し、推進協議会会員やワークショップ参加者等とともに、意見交換を行うことなどが考えられる。また第2回目には、推進協議会の2年間の活動を総括し、加えて第1回目の会議で検討された広域ビジョン案を推敲し、同地域の首長の賛意のもと、発信することなどが考えられる。
年間スケジュール	「②運営体制の整理」で言及したように、2019年度は「（仮称）SDGs甲子園」事業の道東開催に係る協力を、推進協議会として取り組むこととした。このため同時解決事業の年間スケジュールにおいても、こうした関連事業の進捗を見定めながら、よりよい成果を上げることができるよう適宜調整しながら事業を進めることとする。

⑥ その他補足事項

■ 事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・ 2019年度、ワークショップを「持続可能な第一次産業の実現」をテーマとして開催する際、漁業関係者の参画をどこまで得ることができるかは重要なポイントであるが、時期や地域によっては、漁業者の参加が難しいと推測される。そうした場合においても、できる限り漁業と関わりのある民間事業者（例えば水産加工業や飲食店、小売店等）や、直接的に関係は薄くても課題解決を図る上で参考になる地域の優良事例の共有等を進めるものとしたい
- ・ 2018年度のワークショップでは、もともと活動が計画されていたNPO法人シマフクロウ・エイド（浜中町）関係者を除き、地域のコアメンバー（SDGsの観点から地域の課題に取り組むチーム）による事前打ち合わせはなかったが、上記のとおり、テーマをある程度、絞り込む上では、ワークショップをどのように活用し、どのような成果を見込むのか、地域ごとの戦略が必要と考えられる

■ その他、留意事項などがあればお書きください

- ・ 上記2項目めで触れた、ワークショップを通じて地域にSDGsを導入しようとするプロセスを整理、発信することは、道東地域の今後のみならず、SDGsを実装しようとする他の地域にとっても有効な先進的な事例の紹介となりうる。伴走支援を行う地方支援事務局（EPO北海道）とそうしたプロセスの分析に取り組み、取り組みの報告冊子においても紹介することが、事業協働や政策協働を進め、行政機関の参画を得る上でも有効なのではないかと考える

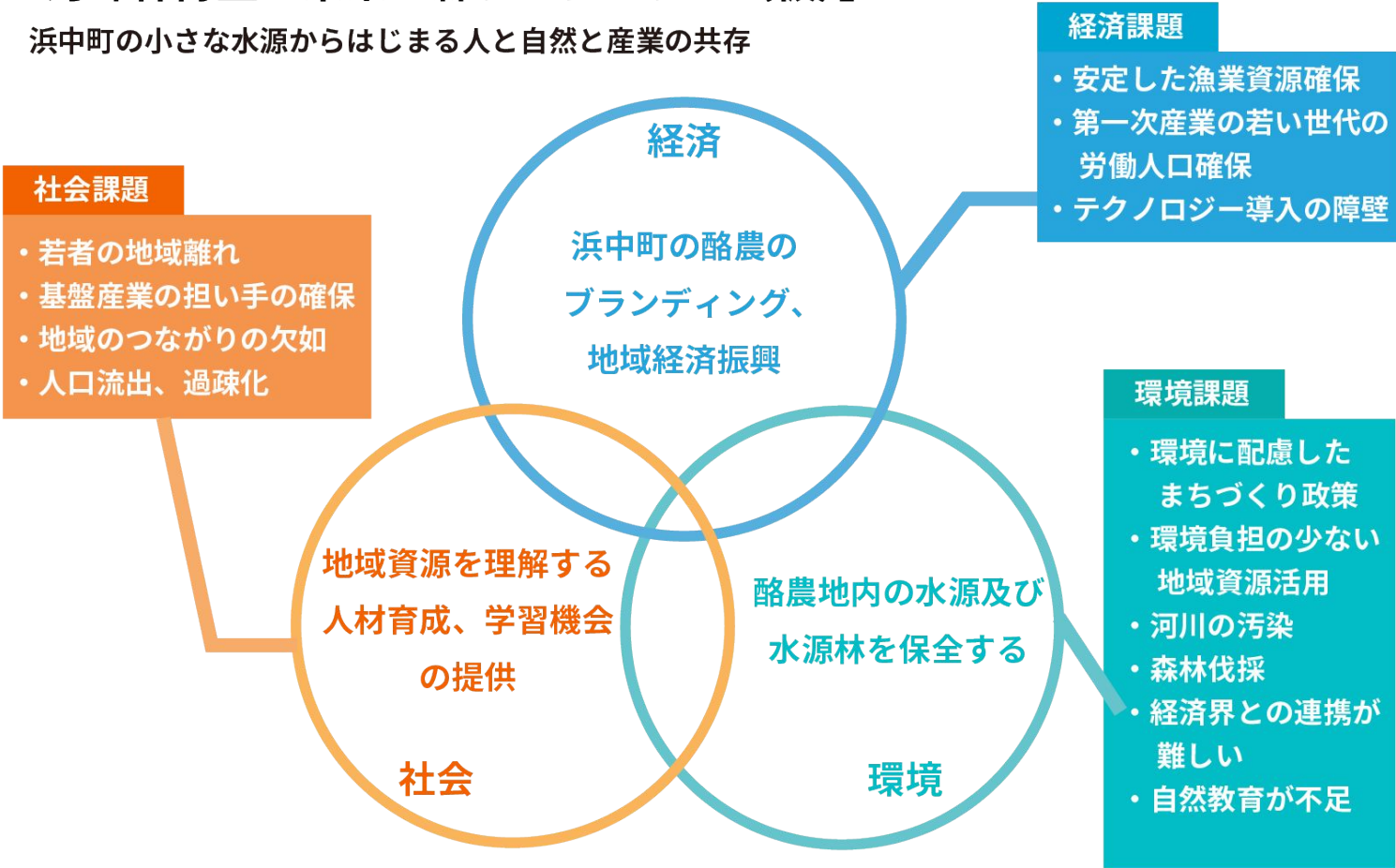
①何と何の同時解決を目指したか

採択団体名：道東SDGs推進協議会（中標津素材感覚）
採択事業名：道東SDGs広域パートナーシップまちづくりプロジェクト

道東 SDGs パートナーシップまちづくりプロジェクトをきっかけにスタート！

「河畔林再生 未来の森プロジェクト（仮）」

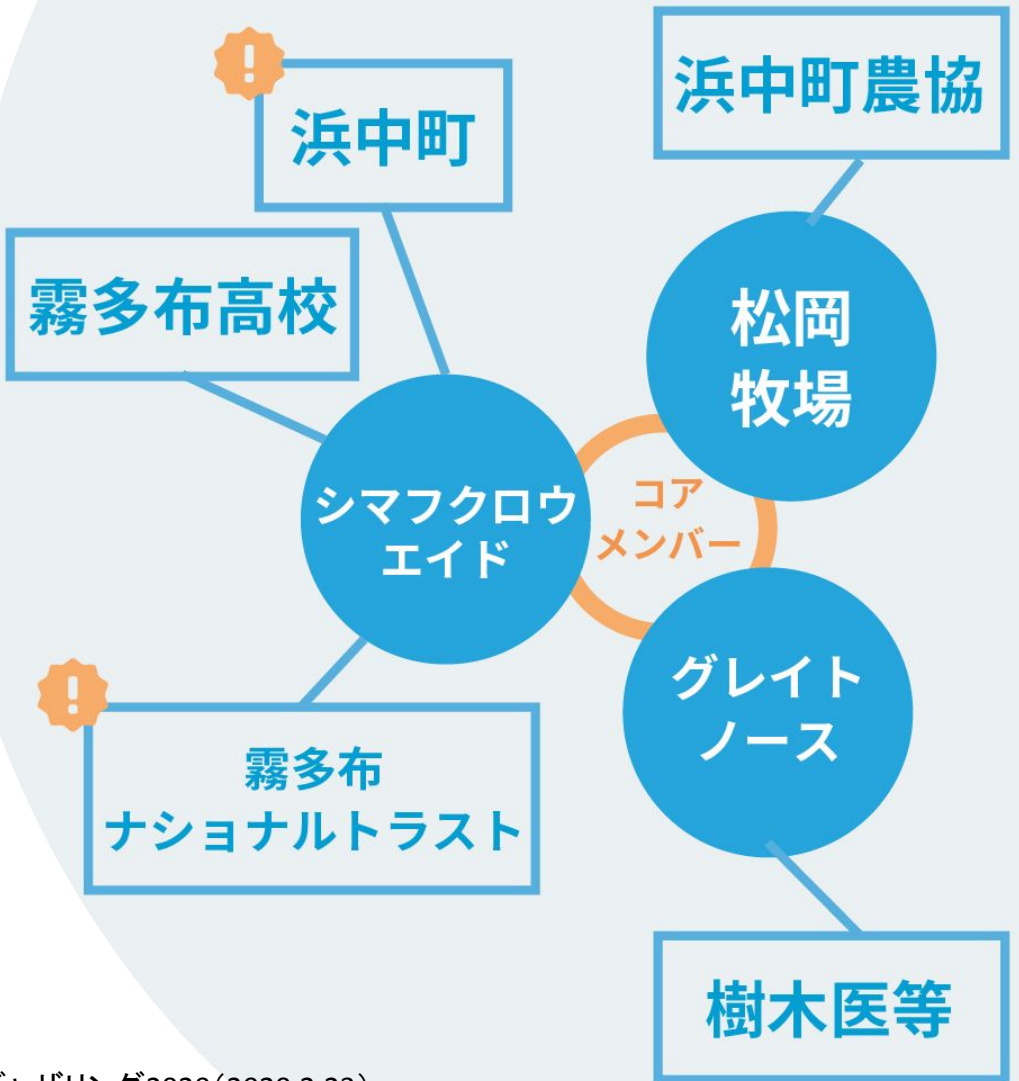
浜中町の小さな水源からはじまる人と自然と産業の共存



道東 SDGs 推進協議会



浜中町「河畔林再生 未来の森プロジェクト（仮）」チーム



! : 未参画

OUTPUT

- ・ 高校生以上向け教育冊子作成
- ・ 広域ビジョンの策定
- ・ 未来の森プロジェクトをはじめとした、各地域での自発的、内発的な取り組み

LEARNING

- ・ 共通のビジョンをベースにした対話・実践が「ゆるい」協働関係をつくる
- ・ 基幹産業の経済 / 環境課題を複数の関連団体がジブンゴトとして共有し、関連団体の事業が活きることで基幹産業が守られる座組が効果的（検証中）
- ・ 地理的な距離が直接情報の共有の障壁になるため、地域を隔てて道東の持続性を目指す組織たちが協力 / 切磋琢磨できるよう、中間組織がオンライン / オフラインの関係性を創出、維持することが大切

3年後の展開

現在・

これからのネットワーク

自発的事業グループ

- ・ シナプスねむろ
（学校教育や社会教育、SDGsの学習）
- ・ 中標津町教育活動

コミュニティ・ビジネス創出の
ネットワーク形成

- ・ 協議会のネットワークを活用した情報共有、競争関係が構築され、関連組織が相互に好影響を与える

官民共同広域ビジョン確立

- ・ 道東広域事業の基盤となる
広域ビジョンを官民一体で確立させる

高校

教育委員会

自治体

農協

道東広域事業の形成

- ・ 同時解決事業をモデルにして
広域の事業体が形成される。

自然保護団体

同時解決事業グループ

- ・ 河畔林再生 未来の森
- ・ 中標津オーガニックウイスキー
- ・ 道東地域エネルギー会社



前の

多様な分野・広域での交流 →「同時解決」のアイデアを加速化

- 同時解決プロジェクトを取り組んだメインの地域、根室管内・釧路管内の人口は_____人で人口密度は_____人／km²。それに対して牛の頭数は_____頭。
- 「アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ」といわれても、人口密度の低い地方部では、多様な人たちが“たまたま” 出会う機会是不够ずか。まずは業種や物理的な距離を超えて、人々が出会う場をつくり、刺激しあうきっかけをつくることが不可欠。

SDGs は“接着剤”であり“窓”

- 人々の交流を生み出す“接着剤”としてSDGsを活用。同時解決事業として、根室管内5市町でワークショップを開催したところ、事業者やNPOスタッフ、行政職員等を含めて、延べ200人以上の参加があった。広域ビジョン検討会には首長の参加もあり、民間によるSDGs 関連の取り組みに対する、行政の期待の大きさがうかがわれた。
- SDGs はいまの世界を知る“窓”であると同時に、地域の未来をのぞきみる“窓”にもなる。バックキャスティングの考え方で、ワークショップで集められた未来の素材をもとに、「環境」「経済」「社会」の3側面から広域ビジョンを整理、複数の側面が重なるところに同時解決のアイデアを埋め込む。

「同時解決“事業”」 と「広域」 の意味再確認

- 「広域」で、できる限り足並みをそろえて取り組んでいこうというプロジェクトであるため、第一段階である「SDGs の周知・理解促進」に力点が置かれがち。そこで終わらず、持続可能な社会づくりに向けた同時解決事業につながるように意識付け。
- 一方で、採択のポイントとなった「広域」の意味合い、強みについて問いかけ。共有により「競う」意識と「連携」が生まれ、個々と全体の取り組みが加速化する。
- 意見交換の結果が適切に積み上げられるように、記録・ふりかえりをサポート。他事業も活用し、道東地域へ交流機会を提供。



1. プロジェクトの目的

かつて森林地帯だったここ浜中町は開拓を繰り返し現在の酪農王国を築き上げました。未来を先取りした環境に配慮した農業を推し進め、放牧酪農の普及や、1981年の酪農技術センター設立による酪農人材の育成、後継起業の推進、再生可能エネルギーの積極的な導入は、地域振興としても大きな評価を受けています。また、2001年(平成13年)より町内の酪農家、地元住民の有志が開始した「浜中緑の回廊」事業は、酪農地を超えて多様な生き物が生息可能な環境の保全・回復をはかろうという画期的なものであり、霧多布湿原など豊かな自然を誇る浜中町の強みを十分に生かした取り組みだと考えます。

このプロジェクトは、上記のような浜中町の酪農業の歴史、強みを踏まえ、さらに「持続可能な酪農業」を先導し、道内の他の酪農地にも広げていくために、近年、道東において知床地域から絶滅危惧種シマフクロウの生息地拡大が検討されていることや、国内における森林環境税の活用、気候危機を含めた世界的なSDGs(持続可能な開発目標)などの浸透を背景に実施しようとするものです。

2 プロジェクトの概要

このプロジェクトでは、さらに進んだ「持続可能な酪農業」の浜中モデルを模索するため、「緑の回廊」事業の精神を進めていこうとするものです。

「緑の回廊」の精神を踏まえるということは、単なる環境保全活動ではなく、地域経済の振興や人材育成(学習機会の提供)にも結び付く事業展開を検討していきます。

具体的には、調査や植林、環境教育の実践により、酪農地内の水源及び水源林の回復に取り組みます。事業展開にあたっては、パイロット事業として「Grateful Farm 松岡牧場」の所有地における水源・水源林保全に焦点をあて、生物多様性の回復と酪農業の新たな両立をはかるものとします。

調査費割合による立地一帯への対外費割合の平均1891.7%

本流と支流の出合いポイントまでの約10km。水生生物、魚類、陸生昆虫、植物・菌類の生息確認調査を実施。陸生昆虫は指標生物の調査を実施することを検討している。8～9月を対象に実施

びメンテナンス（草刈りなど）

0年)は、5月に、松岡牧場内における
河畔沿い約1ヘクタールに植樹を検
などには、ふるさと教育・キャリア教
の視点から、小学生などの参加も可能

(2021年～)、学校の協力を得て、授
、種蒔き、苗の育成、ポットへの移
植栽までの実施の検討を行います（普
重の再生）。

活動と平行して、道東地域ならではの「持続可能な酪農業」に関する賛同、ひろげるため、情報発信を行う。

公岡牧場（浜中町姉別緑栄）

成果をば、雄り郊の廻回の林路水む其路水の内世費諸

エクトにより、「持続可能な酪農業」の取り組みが進む

していくことで、浜中町内や道東広域
組みが広がり、
の再生による生物多様性の回復(環

境)、地域の酪農業への新たな価値の付加(経済)、環境を見据えた農業の先導による、環境意識の高い世代の獲得、持続可能な地域づくり、世界への貢献(社会)へとつながる。

6 企画実施主体

- ・ Grateful Farm 松岡農場 (浜中町)
- ・ The Great North (厚岸町)
- ・ NPO法人シマフクロウ・エイド (浜中町)

※他に環境省北海道環境パートナーシップオフィス(札幌市)等の協力団体

Think globally, Act locally

浜中町の小さな水源からはじまる人と自然と産業の共存



私たちは持続可能な酪農と生物多様性保全の同時解決を目指し
「Grateful Farm 松岡牧場」の所有地を水源とする川から
河畔林再生の植樹事業を多様な主体と協働で取組みます。

河畔林再生 未来の森プロジェクト（仮）

第2回 道東 SDGs 広域ビジョン検討会

[日 時] 2019 年 12 月 13 日（金）14:00～16:00

[場 所] トーヨーグランドホテル2階 瑞淵

[参加者] 19 名

1 開会挨拶

- ・本日はお集りいただき、ありがとうございます。先日、世界の乳業協会の勉強会に参加した。二酸化炭素の排出削減や緑と水の保全、アニマル・ウェルフェアなどに関する発表があり、世界は持続可能な酪農業の実現に向けて動いていることを確認した。酪農家の参加が少なかったのは残念だった。道東地域は酪農が基幹産業。SDGs を活用して将来、いかに地域が豊かになれるか、次の世代の働き手が集まるかを考え、若い人たちの話を聞いて背中を押していけるようにしていきたい。

2 参加者紹介

- ・第1回検討会に参加。釧路管内でも行政、民間団体を含めて SDGs の動きがある。
- ・昨年開催されたワークショップに参加。来年度からの総合計画を策定中であり、SDGs とタイアップした取り組みを総合的に検討していきたいと考えている。
- ・この地域は酪農と水産の地域。お互いに環境に一番配慮し、環境に優れた地域だということを発信していくことが一次産業の付加価値を高めることだと考える。酪農と水産の調和も進んでおり、酪農による環境負荷は改善されている一方、水産資源は減ってきている。この地域にとって大事なものは環境であり、具体的に取り組んでいきたいと考えている。
- ・現在、第7期総合計画の策定に向けて取り組んでいる。SDGs を意識した指標の設定に向けて職員に意識付けを行う。
- ・最近、町政に SDGs の考え方を埋め込んでいこうという話があり、勉強を始めてようと考えていた。協議会の活動は新聞等で拝見した。勉強させていただきたい。
- ・SDGs は、時代の流れにおいて非常に重要な目標。道東が道東らしく、何ができればよいのか議論を深めていければよい。

3 道東 SDGs 推進協議会の活動報告

- ・普及啓発活動では、ワークショップ及び学習会に延べ 350 人が参加。また「道東 SDGs ハンドブック」を発行した。
- ・ワークショップの成果等に基づいて、中標津町でのウィスキーづくり応援プロジェクト、浜中町の酪農地での水源地保全・植林プロジェクトが生まれている。
- ・「SDGS QUEST みらい甲子園」の一環として、1/11（土）に釧路市で高校生を対象とした公開プログラムを行う。

4 今後の展開に係る提案

- ・官民連携による広域連携体の組織をつくりたい。首長をトップとして地域横断的な課題を話し合う場としたい。勉強会を連続開催し、また可能であれば、次年度が最終年となる SDGs 未来都市の申請にもつなげたいと考えている。
- ・また、地域を網羅できるよう他の民間団体も入ったプラットフォームをつくりたい。官民連携体のキックオフフォーラムを 2/29（土）に中標津町で開催し、宣言等を発表することを考えている。
- ・道東 SDGs 推進協議会としては、官民のつなぎ役として機能する。引き続き、SDGs の情報発信を出前講座などで行うほか、「SDGs QUEST みらい甲子園」の実施、同時解決プロジェクトの支援等を考えている。

5 意見交換

- ・どのような課題に取り組むのかを具体的にしなければ、前に進んでいかない。地域全体、町民全体で取り組むには、17 の目標すべてではなく、具体的にどの課題に取り組み、どのような目標値を設定するかが重要。
- ・それぞれのまちで持続可能な地域づくりに取り組んでおり、SDGs を組み込んでいこうというのはトレンド。10 年後にこのような姿にしていきたいと思いますというのも、それはそのとおりだと思う。しかし地域によって課題感も違う中で首長を交えた連携組織をつくるには、例えば共通課題を取り上げる必要がある。やろうということになっても、何をするのか困ってしまう。何を取り上げていかに深掘りするのか、そこが見えてこないと連携は遠い。
- ・広域だからこそ取り組まなければならない共通項を見出していく必要がある。例えば、気候危機や教育、観光の分野。すでに道東各地で実施されている「ふるさと教育」を連携していくことなども考えられる。別に関わっている横浜市の場合は（ヨコハマ SDGs デザインセンターを中心に、市民・企業・大学等と連携し取り組みを進めて、木製ストローを軸として）脱プラを進めている。
- ・道東という根室と釧路の広域で、かつ事業者を巻き込んでいくとすれば、SDGs の意義やその達成のために、広域連携などが必要であるということから伝えていく必要がある。私たちの地域としては、根室管内を中心に SDGs を推進していこうという動きがあるということを持ち帰り、まちや地域の発展につなげていければと思う。
- ・ビジョンは目指すべき 10 年後の姿で、かつ不可能ではないと思う。すでに取り組んでいることに沿っていて、さらに力を入れれば実現するものになるので、よいと思う。ただし首長を含めたネットワーク化については、どこまで声をかけるかということがあり、自治体の間でも中でも認識や熱意の差がある。それを調整するには相当時間をかけて、丁寧に説明していくことが必要ではないかと思う。SDGs についても、10 年後という期間であるので、説明を丁寧に行えば、一緒に取り組んでいくことは可能であると思う。
- ・酪農家と NPO の方が多く参加したワークショップで SDGs について学んだ。どちらの自治体でもそうだと思うが、すでに「持続可能な開発」に取り組んでいる面がある。また、釧路管内と根室管内は産業形態などで共通していることが多く、隣接している地域ではすでに連

携もしている。今回は根室管内が中心であるが、さらに釧路管内の自治体とも連携していく必要があると考える。

- ・釧路市内で SDGs 交流セミナーを開催。管内から多様な分野や立場の方が参加され、SDGs に対する関心は非常に高いと感じた。行政は総合計画や地方創生施策、災害対策に SDGs を組み込んだり絡めたりしており、また企業は事業にあわせた活用をしている。
- ・アプローチの仕方が根幹的に違う。自治体としては総論賛成、各論は難しいということになる。行政は総合計画、各種計画にあわせて SDGs の目標を落とし込んでいく。また、スケジュール感として、来年3月に宣言するというのは議会、住民との調整により難しい。
- ・具体的に数値で捉えていくのが SDGs のもう一つの特徴。例えばフードロスに関わる数字、温暖化対策に係る数字を落とし込むなど。
- ・SDGs に関する連携組織をつくろうとする目的は何になるか。各自治体では「持続可能な開発」に向けて、取り組めるところはすでに取り組んでいるという認識である。いまさらその上で連携組織をつくろうとした場合、どのようなことがプラスになるのか、町民に説明責任を果たすことが必要になる。それに答えられるようなものにしなければならない。
- ・ビジョンなど、全体的なものを考えるのは行政の役割かなと考える。協議会はいずれかの分野に特化していくとよいのではないか。「観光」と「教育」の話題が出たが、広域観光はすでに組織があるため難しいのではないか。どのように連携していくということかと思う。協議会の方向性、立ち位置をもう一度、考えた方がいいのでは。
- ・民間の団体が運動の方向性を示すことはよいと思う。地域差があるので、状況を見て段階を追いながら進めたり深めたりできればいいのではないか。
- ・「教育」については既存のふるさと教育、ユネスコスクールの取り組みが進み、SDGs の考え方を全校に取り込んでおり、新しい事業は難しい。「観光」はすでに広域で取り組んでおり、交通やインバウンド、教育旅行など取り組みがある。それぞれ課題はたくさんあるが、新しい事業は思いつかない。まず既存の取り組みを洗い出して、足りない部分を補っていくのが協議会の役割になるのではないか。
- ・広域ではないとできないことを考え、優先順位を付けていくことが重要。個人的には気候変動の緩和、適応を含めて考えて、気候危機を優先してすべきと考える。気候危機をテーマとすることで、脱プラや食品ロスの削減などにもつながる。何かしらの具体的な広域で取り組むべきテーマを掲げて取り組んでいけるとよいのではないか。
- ・広域で取り組んでいるテーマ、思いつくところでは「観光」「公共交通」「教育旅行」「廃棄物処理」「地域医療」などがある。「環境」問題では個人的には、ふん尿の臭気の問題も。「再エネ」「水」等の連携協定などもあるかと思う。探していけばあることはあるが協議会として事業化していけるかどうか、馴染むかどうかという問題がある。
- ・理念だけであれば 2030 年という年限を切る必要はないので、協議会としても目標設定が必要だと考えているということだと考える。広域連携によって、新たに取り組めることがあるのは確かであるが、具体的な目標を設定していただきたい。
- ・環境省の事業では「地域循環共生圏」に係るさまざまなメニューがある。変革に向けて目標を設定して、そこからバックキャスティングで具体的にに取り組んでいく必要がある。地域の

多様な方たちが集まり、対話が重ねられたのは大きな成果である。それを具体化していくのが次のステップである。

- ・地方消滅の話題があった。地域がどのように持続可能になるかということを考えていくのも重要ではないか。

以 上